

笠置寺

(巨石の山)

木津川の南、人里離れた標高 288m の笠置山の頂上に笠置寺があります。寺院は、山道と巨石を包む自然の地形の中に、その巨石が神聖なものと考えられていた 2000 年ほど前に、起源を持つとされています。現在、笠置寺は、高さ 16m の巨石「磨崖仏」（岩石の表面に刻まれた仏様）でとても有名です。本尊は、独特で仏像ではなく、岩石に刻まれた弥勒菩薩です。弥勒菩薩は、未来の世界に現れ、釈迦がこの世界からいなくなった後、悟りを開き多くの人々を救済する菩薩であるとされています。笠置寺はその地形により、長い間僧侶の身体的精神的な修行の場とされていました。現在では、訪問客もその山道や修行の道を歩くことができます。

歴史

笠置寺は、2000 年以上の歴史を持ちます。有桶式石剣（紀元前 300 年から紀元 250 年くらいの日本の石器時代である弥生時代に使われていた剣）の一部がこの地域で発見されたことにより、笠置寺の起源がわかります。初めて寺院が立てられ、人が住み着いたのは 1300 年ほど前になります。この時、東大寺（奈良の有名な寺院）開山で別当であった良弁とその弟子の実忠によって、様々な仏像が岩石の表面に刻まれました。そして笠置寺は、僧侶の厳しい修行の場として多くの信仰を集めました。

1052 年、日本で「末法」思想が盛んになってきました。その結果、笠置寺は多くの信者を得ました。末法思想によると、仏教の教えが忘れ去られ、世の中が苦しみの中へ堕ちていく時が来るとされています。このため多くの信者はこの時、笠置寺の大磨崖仏（岩石の表面に刻まれた仏様）を天神彫刻の仏として信仰しました。

また 1191 年には、学僧として名が高かった貞慶(1155 – 1213)が笠置寺に住していました。勉学を励むために笠置寺に来たと考えられていますが、貞慶は、その間寺院の再建や弥勒信仰の会を創始するなどとても盛んに活動していました。その活動により笠置寺は、宗教の山として全盛を極めました。

1331 年、幕府（封建的な武家政権）を倒す計画に失敗した後、天皇は笠置寺に逃げて来ました。一ヶ月にも及ぶ攻防の末、笠置山は、全山焼亡してしまいました。このため笠置寺も崩壊してしまいました。以後、少々の復興をみましたが、江戸時代（1603 – 1868）荒廃しました。そして、1868 年、無住の寺となりました。1876 年、丈英和尚によって復興が始められ、20 年後ついに現在の笠置寺となりました。

宝物と芸術品

笠置寺は、高さ 16m の巨石「磨崖仏」（岩石の表面に刻まれた仏様）でよく知られています。寺院のメインとなる磨崖仏は時間の経過で表面の仏様が削られてしまっていますが、その他のものの中には、くっきりと残っているものもあります。笠置寺には、「十一面観音立像」をはじめ、巻物やその他の遺物を含め、20 を超える重要文化財が保管されています。